

## 【観光交流】分科会

### 発表団体

| 府県   | 市町村 | 発表タイトル                                   | 団体名                            |
|------|-----|--|--------------------------------|
| 福井県  | 若狭町 | 若狭鯖街道熊川宿の<br>みんながよくなるまちづくり               | 若狭熊川宿まちづくり特別委員会<br>若狭町         |
| 京都府  | 宮津市 | 宮津市の自然・歴史文化・生活技術を活かした<br>エコツーリズムによる地域づくり | 宮津市エコツーリズム推進協議会<br>(事務局：宮津市)   |
| 大阪府  | 大阪市 | 映像を活用した観光推進と地域活性                         | K & Y Distribution LLP         |
| 和歌山県 | 田辺市 | 地域の光を観る<br>～田辺市近露の山から～                   | 和歌山大学観光学研究科                    |
| 京都府  | 京都市 | うるわしのみち愛宕古道街道の観光交流                       | 「うるわしみち 愛宕古道街道を良<br>くする会」推進協議会 |



### コメンテーター



大谷 新太郎 氏 ( 阪南大学国際観光学部准教授 )

[プロフィール]

阪南大学国際観光学部准教授。

1974年富山県生まれ。

立教大学大学院観光学研究科観光学専攻博士課程後期課程修了。

七尾短期大学専任講師、阪南大学国際コミュニケーション学部助教授(准教授)を経て2010年より現職。

専門は観光マーケティング論、観光情報論。

和歌山大学観光学部非常勤講師、日本観光ホスピタリティ教育学会理事、日本観光研究学会関西支部事務局長、敦賀市観光振興計画策定委員会副委員長、韓国観光広報諮問委員会委員(韓国観光公社)。共著に『観光事業論講義』、共同執筆に『観光実務ハンドブック』など。

はじめに

コメンテーター 大谷氏

今回、たまたま基調講演のほうも観光というのが表にでてきていたのですが、観光のことばの捉え方は、非常に難しく、狭い意味では、ほんとに観光事業者たちがやってるような活動になってしまうんでしょうけども、そのあたりは、特にこだわりは持たずに、先ほどの講演にもありましたけれども、地域の方が頑張っている、それを見に行こうと人が集まってくる、人の行き来が生じる。それぐらいの捉え方でけっこうですので、地域の皆様が頑張られていて、地域の宝を磨いて、それを伝えようと努力されているようなお話ももちろん、今回のこの分科会のテーマに合致するのではないかと考えております。それぞれの皆様方の熱い想いを語っていただければと存じます。

若狭鯖街道熊川宿の

みんながよくなるまちづくり

若狭熊川宿まちづくり特別委員会 河合氏

大谷氏：他の地域から見ると、重伝建があって、自然に、ほっといてもお客さんが集まってくるんだらうと思いがちなんですが、実はその地域住民の主体となった活動に裏打ちされている、ものすごい努力が積み重ねられてるところが、伝わってきたのではないかなと思います。一方で、かなり苦労された点も、ありがたいでしょうし、あるいは、こうやって活動を、どんどん積み重ねられていく上で、何か秘訣のようなものもあったかと思えます。観光を否定するものではないと、最後におっしゃっていましたが、かなりお客さんが増えたと思いますが、そういったことに対して、地域住民の皆様で温度差があったり、あるいは、ちょっとこれは困るんじゃないかという意見などはありましたか。

A：始めは、観光客が来られるとかなわんいう方も、おられました。今は、大勢の方々がお見えになりますと、もうそういう話は、直接、私の耳に入ってくるということはありません。ただ、一部、中心の中ノ町は道は広いが、あとは、昔

の鯖街道という形ではいじれない。大勢の方が来られるときは、一方通行をすとか、何かするときには、通行止めにするとかいうことも、実際的にはある。しかし、これは、地元の生活道路として使っている。地元の人とは別として、他所の人も来れないというのは、非常に難しさがある。今後、いづく時代村というお祭りごとを秋にするが、このときは、300人足らずのところ、一万人を超える人がお見えになりますので、それは、やっぱり通行止めにはしますが、宣伝ばかりしてやって、駐車場は少ないじゃないか、ということ怒られます。なかなか、このごろは、1人1台の時代で、相当広い駐車場も設けているわけですが、なかなかうまくいかないことがあることは事実です。

Q：受賞式の際のご挨拶のなかで、住民が先に汗を流して、その姿を行政に見せれば、行政のサポートも得られるというふうにおっしゃっていましたが、今の行政との関係はどのような状態ですか。

A：今は、行政の指示を受けるぐらいのもので、素晴らしい職員に恵まれました。人間1人では、何もできません。今、行政は非常に気張ってやっていただき両輪のごとく、ということなんです。どっちかが先導する、あとはどうや、ということやなくて、自慢ができる、うまくやっている。

A：今年は、歴史文化課というところで、文化財を担当しておりまして、伝統的建造物の保存地区というふうになっていますので、建物の修理とか、そういったところの担当ではありますが、やはり、伝建地区というのは、建物だけを直していても、その町は続いていかない。その地域の歴史性とか、文化とか、何よりも、やっぱり、そこに住んでらっしゃる方の生活というのを守っていく。さらに、それを街並みに生かして、繋げていくということが非常に重要だと思っています。そういう修理というところから、関わりは始まっていますが、皆さんと一緒に熊川の街並みを守っていくということで、非常にその辺りも、若狭町の町長、始め、理解があります。

## 宮津市の自然・歴史文化・生活技術を活かした エコツーリズムによる地域づくり

宮津市エコツーリズム推進協議会事務局 山口氏

Q: ものごとを作っただけではどうにもならない。これを、資源として続けていくには、どういふうなやり方を、今後考えていこうかと思っていますか。

A: エコツーリズム推進協議会の24年度の最大のテーマは、今、行政が事務局をしており、立ち上げて4年目になりますが、行政から独立をしていただくということである。その組織、あるいは体制はできました。今、旅行会社と着実に当たる旅行商品として、皆さんにお客さんを仲介していくかどうか、今、調整中ですが、基本的には、行政から離れていくという、自主独立の組織として、地域貢献をしていこうということ、今年、最終的に組み立てるということになっております。

Q: 最初の勉強会を始められたときというのは、行政主導で行われたということなんですか。そのときには、ある程度、地域の方を巻き込む見込みと申しますか、ある程度できそうだというような感触は、おありだったのでしょうか。

A: 半年間、この組織づくりのためにかかりました。普通の協議会ですと、行政がしますと、観光協会などが入って、シャンシャンシャンと協議会が発足できますが、これは、最終的には、皆さんに活動していただくので、行政は、最初の立ち上げを仕掛けるだけで、あとはもう、皆さんですと。ガイドもですし、体験もです。よし、やろうというまでに、なんで、そんなことも、こんな地域でしなければいけないのかと、なかなか理解いただけなかったため、半年間かかりました。この事業は、研修会の講師謝礼、あるいはガイドブックの印刷費は、京都府の地域力再生プロジェクト支援事業の補助金を活用させていただきました。

Q: こういう取り組みをしなければいけないということ、行政の側が気付かれたきっかけは何だったんですか。

A: 1つは、観光に対する危機感。この事業をやっているうちに、この素晴らしいのは、リピーター率が非常に高い。今、ガイドも団塊の世代ですが、このエコツアーにお見えになる人も、団塊の世代の人です。みな、リュック背負って、登山靴履いてという、山登りとか、山歩き、ウォーキング大好きな方です。秋の紅葉を見て、今度は、春の芽生えを見に来るといふことで、

天橋立には1回しか来られないかも分かりませんが、山歩きは何回も来たいというような方が多い。経験産業と、その経験するとか、体験するという観光産業だと思います。今、ただ見る天橋立のスポットから、食だとか、あるいは体験とか、学ぶとか、ここでしか味わえないもの、というキーワードで活動しています。体験も当たり障りのない体験ではなく、藤織とか、東京からでも、これを見に来る方もおられますので、やはり、日本でこしかなない、というものを、全面的に出しながら、守っていきながら、活用していきながら、ということに心がけております。

大谷氏: ありがとうございます。桑田先生のお話のなかで、こういった商品も、最近はコモディティ化しつつあり、他との差別化ができなくなりつつあるという指摘がありましたけれども、これだけこだわったガイドの養成から、その商品の中味へのこだわりまで、こういった取り組みをされていることで、ある意味、コモディティ化には乗っからないでも、自分たちの商品を何度も利用していただけるということ、他地域にもヒントになる事例だったのではないかと思います。

Q: 地域に住んでいる人たちには、地域のよさというのは、案外分からないということ、それをどのようにして発掘されたのか。

A: 大阪の子供たちが宮津市に来られましたが、2泊3日で二百数十名来て、6班ぐらいに分かれて受け入れをしました。天橋立は、最後に掃除だけして、天橋立、ほとんど行きません。もう周辺で、いろんなことをしました。この棚田で、畦道を歩いて、オタマジャクシに感動されました。私は、もう感動しませんが、大阪の子供たちは、オタマジャクシを見て、ものすごく感動していました。他に、地引網体験があります。これは、どこにでもあります。地引網体験は、愕然としました。これは、子供が、この地引網って、魚、こうやって、どっかで入れとるんと違うの。子供たちが喜ぶように、漁師さんが、ピュピュッとこう、どっかで入れるんやないというのを、完全に読んでるんです。やはり、本物というのは、そこにあるもの、本物、やっぱり小細工をしてはいけないという、子供たちもよく分かっているというなかで、やっぱり、そこにある本物を見せる、これが、一番子供たちに感動を与えるということが、最近よく分かりました。外から来られる方に教えられました。

大谷氏：先ほどまでの発表が、本物へのこだわりというところがポイントだったかと思うのですが、そのこだわった本物を、どう伝えていくか、先ほどの基調講演でも、宝をどう伝えるかというところもありまして、その辺りに、たぶん他地域の方々も、相当、刺激的に感じられたのではないかと思います。酒というのを、各地域の宝、あるいは、本物へのこだわりというふうに置き換えていただくと、情報の出し方っていうことのヒントに繋がってきます。

Q：国内の旅行に関しても、こういったことが、できそうですか。

A：基本的には同じだと思いますが、いろんな話を総合していくと、だいたい、自分たちはこれがいいですよ、これがいいですよ、これがいいですよとなるわけです。でも、先ほどおっしゃったように、外から見た人はオタマジャクシに驚く、自分たちは、まったく興味がなかったといったら変ですけど、観点がないところ、自分たちがいいと思っているところに、あんまり振り向かないというところがあるので、その人たちがいいと思うものを、どれだけ提案できるかだと思います。お酒という商品は出していますけど、そのうしろにある、日本の文化だったり、歴史だったり、そういうところに興味を持った方は、お酒を飲むなかで、飲みたいだけだったら都心でいいわけですが、でも、その蔵まで行って、その環境で何かを感じてもらいたい。今、紹介した蔵、全部、外国人が行っても蔵ツアーできるようになっています。それは、それぞれの蔵の方の努力でやられているのですが、ただ、別に宣伝をしているわけじゃないので、当然、そんな遠くまで、外国人が行きますかっていうと、単独ではまず行かないということなんです。そういうところでも、ツアーを準備していたりはするので、彼らが自分でウェブサイトを照会しても、なかなかやっぱり来ないわけです。こういう風に見せて、このお酒飲みたいな、と思った方が、わざわざ日本まで来たら、そこまで行くだろうっていうのは、彼らが思ったんですよ。僕らが美味しいでしょうっていうわけではないです。語っている外国人が、メインのナビゲーターとして番組を進行していきながら、その人のいうことに、自分がどう感化されてるかっていうことで、我々がこの商品がいいですよとか、日本がいいですよっていう話は、基本的にしないようにしています。

Q：この生け花に着目した取り組みというのは、何か、そういう事業としての体制を作られて、展開されているのですか。

A：今、3つの事例を紹介しましたが、すべて取り組みの主体が違って、あくまでも、僕が関わらせていただいた、僕の視点で語っているものなので、どの組織も、ある意味では繋がっていて、ある意味では繋がってないっていうような状況になっています。

Q：どういう立ち位置で関わっておられるのですか。プロデューサーとか、アドバイザーのようなお立場なのですか。

A：当初は、近露まるかじり体験というところを、卒業論文に取り上げたんです。地元の方とやっていくうちに、その地域の方々と協力して何かを作っていくっていうことに、すごく興味が出てきて、また、社会自体もそういうふう動いていっていたので、そこをスタートにして、近露の山から花材の提供を受けたりすることによって、いろんな地域と結び付けていくっていうのを目標にしていきました。

Q：実際のところ、先ほどから、たとえば、資金の問題であるとか、継続性の問題っていうようなやりとりがございましたけども、その辺り、どうですか。この先、どのような形で、どういう方向に持っていきたいというようなお考えがありますか。

A：卒業論文で取り上げた近露の地域でも、準限界集落、55歳以上の人口が過半数を占めているという地域でしたが、人材不足と資金不足というのは、非常に大きな問題があって、人材不足に関しては、僕みたいな学生が地域に入ることによって、交流人口を増やしてカバーしようと思ひ、資金に関しては、そもそも、なぜ資金が必要かっていうと、一方的に、向こうから何かを購入するから必要なんであって、向こうに対しても、お金の代わりになるようなものを提供すれば、それで、ある意味、Win-Win というか、等価交換が成り立つので、お金がなくなると思っています。お花の勉強を続けていって、また、観光の勉強というのを続けていって、地域の方に何か還元して、かつ、地域の方からも何か得られるっていうような状況を作っていくと、お金っていうのが、ほんとに、ある意味では要らなくなってくるって思いました。今回のショウウィンドウの花を一から買おうと思うと、すぐ十万とかっていう単位にな

ると思いますが、今回、購入したのは、右上にかかってある風とか、色紙のように地域ではもらえないようなものだけ購入したので、実費は、まったくお金がかかっていません。資金に関しては、これからも、そういう地域の方からの合意形成を行って行って、提供をしてもらう代わりに、何かお返しするっていうような関係を構築していければいいな、というふうに考えています。

大谷氏：お金をかけないでも、地域の方々に、何かプラスになるような提案をしていくことで、その事業の意義というものを分かっているように進めていくという方法もあるというようにお聞きしました。この元気な地域づくり発表会も、そうなんです。昔はお金かけてやっていた記憶があるんですが、今はまったく手作りで。こういうふうな手作りでイベントへのヒントということも、西川さんから頂いたように思います。

ネットワークを活用されているというところで、整備局も、こういう活動されてきている成果が、少しずつ出てきていると思います。制度の資料もありますので、是非、ご活用いただきたいと思いますし、今日のような場で、ネットワークを、もっと、もっと、構築していただきたいと思います。小中学校も巻き込んでいるということでしたけども、女性のパワー、そして若い人のパワーをうまく生かされているなあとお聞きしておりました。

#### うるわしのみち愛宕古道街道の観光交流

「うるわしのみち愛宕古道街道を良くする会」  
推進協議会 松山氏 今井氏

Q：前回、ご発表いただきこの1年間で、どういった変化がございましたか。

A：去年は、まだワークショップの取り組みをこんなにしていなかったんですが、去年1年間で3回から4回実施しました。いろんな取り組みができ、みなさんに喜んで頂ける提供ができたように思います。この1月にも、手づくり市をさせて頂いて、いろんな勉強ができました。これからさらに活動し、それを元に、少しずつ皆さんのご要望を聞きながら今年1年、いろんなことさせていただけたら楽しいだろうなあ、と感じています。ワークショップをしながら地域の方も結構交流ができ、楽しんで頂いております。さっきおっしゃっていたように、まずは地域、地域のもんが活気もって、元気で何かやっている、周りも少しずつですけど、順番に、順番にお友達から、また知り合いの方にと、ちょっとずつ輪が広がって行って、口コミみたいな感じで広がっていきました。こうした流れがとっても大事ななと思いますので、これからはがんばって活動を絶やすことなくやっていきたいと思います。

大谷氏：行政との関わりであるとか、これは、どの地域も、どの団体さんもそうなんですけども、いろんな制度を活用されている、あるいは、ネ